

観察者の有無と性別、援助場面が 自己呈示動機・援助行動に及ぼす影響

大西 健未

(神原 歩ゼミ)

問題と目的

私たちは普段どんなことを思い、感じ、考えて人を助けているだろうか。「情けは人の為ならず」という言葉が意味する、親切にしたことで巡り巡って自分に返ってくることを信じて、自分のために誰かを助ける人もいるだろう。このような自分の利益を追求する動機のことを利己的動機と呼ぶ。さらに山本・池上(2019)は、利己的動機の中でも「他者が自己に対して好意的な印象を抱くように働きかけようとする動機」を「自己呈示動機」と定義した。そして自己呈示動機が援助行動に及ぼす影響は、しばしば研究がなされてきた。本研究では、援助場面や観察者の存在などの外的要因が自己呈示動機と援助行動に与える影響について検討した。

自己呈示動機

谷口(2012)は自己呈示の1つの手段として援助行動を挙げた。そして、援助行動において、助けようという意図が被援助者に伝わっても被援助者が援助者に抱く好意は変わらなかったが、「困っていたのがあなただけだから助けた」という援助対象の特定性が伝わると反って好意が低くなってしまふことを示した。Reeder, Vonk, Ronk, Ham, & Lawrence(2004)は被援助者に取り入ろうとする下心が窺える状況、つまり被援助者に対して自己を良く見せようとする自己呈示動機が明白である状況では、利己的動機が推測されやすくなることを示している。

このように自己呈示は、援助に関する数々の先行研究で扱われており、援助場面において自己呈示と援助行動は関係が深いことを裏付けている。

利他的動機

スーパーボランティアとして一躍有名になった

尾島春夫さんは「自分を助け支えてくれた人たちや社会に対する恩返しをしたい。困った人の役に立ちたい。」と語る。彼のように見返りを求めずに援助行動をする人もいるだろう。このような動機を利他的動機と呼ぶ。

河村・楠見(2015)と山本・池上(2019)が利己的動機(自己呈示動機)と利他的動機の測定項目を設けて研究を行ったように、自己呈示動機を扱ううえで利他的動機は欠かせない存在となっている。また、山本・池上(2019)は人が誰かを援助することは自己的側面もあれば利他的側面もある可能性があることについても触れている。このようなことから利他的動機について検討することも有意義であると考えられる。

自己呈示理論：観察者の有無と自己呈示

また、観察者がいると、人は自己呈示動機が喚起されやすい(Cottrell, Wack, Sekerak, & Rittle, 1968)。自己呈示動機が喚起される程度は、自己が価値を置く目標と観察者との関連度によっても異なる(Leary & Kowalski, 1990)。例えば、青年期・成人前期の重要な発達課題である「友人獲得」や「恋人獲得」という目標(Havighurst, 1972; 児玉・飯塚訳1997)を行為者が持つ場合、それらの目標達成に関連する観察者がいる時の方が、自己呈示動機が喚起されやすい(山本・池上, 2021)。人々はこのような自己呈示理論を経験に基づき素朴に理解している。

この観察者が持っている素朴な自己呈示理論は、先行研究である谷口・大坊(2005)や山本・池上(2021)によってより強固なものとなった。しかしこの素朴な自己呈示理論による援助者に対する動機推測が、援助者自身が抱いた動機と的確に合致しているかどうかはわかっていない。数々の動機推測の先行研究では、援助者本人の動機と第三者が推測する援助者の動機が一致しない可能性に

ついて触れているのみで、実際はどうかを明らかにしたものは少ない。そこで山本・池上(2021)の実験デザインをベースに、調査対象を援助者の動機を推測する評価者から援助者自身にすることで、援助者本人の動機と第三者が推測する援助者の動機が一致するかどうかを明らかにすることができるのではないかと考える。

観察者の性別

山本・池上(2021)は被援助者の性別が援助行動に与える影響を検討した研究を参考に、観察者の性別についても同様の傾向(同性より異性の方が自己呈示動機が高まる)がみられることを示した。これは、対象を援助者本人にした本研究にも当てはまると考えられる。

自己呈示理論の部分で触れた「友人獲得」や「恋人獲得」に関連して、友人関係を築くことは、援助者が自己利益を追求しているとも捉えられる。しかし、社会や集団の調和が維持される点で望ましく、利他的な側面も併せ持つ可能性も考えられる。そのため観察者が同性であると、利他的な側面も併せ持つ可能性があるとして解釈できる。これに対し、恋人獲得目標は配偶の機会を得たいという援助者の自己利益の追求の側面が強まるため、観察者が異性であると自己呈示が促進されると考えられる。たとえば、Van Vugt & Iredale (2013)は、特に男性において、異性を前にするとより大きな額の寄付を行いやすいことを示した。これは、女性は配偶相手を選択する際に利他性を重視する(Phillips, Barnard, Ferguson, & Reader, 2008)ため、男性はその要求に応える形で、異性に対して利他性を顕示すると考えられる。

これらのことから観察者が異性であると援助者の自己呈示動機や援助行動が喚起されると考えられる。

援助場面

山本・池上(2021)では、自転車場面よりも踏切場面の方が自己呈示動機が推測されにくいことを示した。自転車場面と比べて踏切場面は、命の危険という大きなコストが伴うため、そのような大きなコストを支払った行為は、自己呈示として認識されにくくなると彼らは解釈した。

そのため、自己呈示動機推測時の傾向と同様に、踏切場面よりも自転車場面の方が自己呈示動機は喚起されやすくなる。また反対に、踏切場面よりも自転車場面の方が利他的動機は抑制されると考える。

その他の援助行動等に影響を与える要因

ここまでは援助行動は自己呈示動機と利他的動機との関連が強く、観察者の性別や援助場面が援助者の援助行動や自己呈示動機、利他的動機に影響を与えているのではないかとすることを論じた。先行研究である山本・池上(2021)もここまでの内容を踏まえて研究を行った。しかし本研究は援助者に焦点を当てた実験であるため、「援助成果」や「援助コスト」についても検討したい。

高木(1997)の「援助授与の生起過程モデル」によると、人は7つの段階を経て援助行動を起こすか否かを決める。「他者の問題への気づき」、「問題の重大性の評価」、「問題解決能力の査定」、「援助責任の所在」、「援助・被援助の利得と出費分析」、「援助意思決定」、「援助方法検討」、「実行能力の査定」の順にステップを踏む。今回は統制するのが難しい「援助・被援助の利得と出費分析」、「援助意思決定」を測定するための項目を設けた。

特に山本・池上(2021)は自転車場面と踏切場面では、コスト以外にも被援助者にもたらす恩恵の程度も変動することを指摘した。そのため、「援助・被援助の利得と出費分析(援助成果)」を測定することは、援助場面による援助行動や自己呈示動機への影響の違いを明らかにする上で役立つと考える。

目的と仮説

本研究の目的は2つあり、1つは山本・池上(2021)で得られた評価者である実験参加者が推測した援助者の自己呈示動機と、実際に援助者が抱えている自己呈示動機は一致しているかどうかの検討をすることである。もう1つは観察者や場面などの要因が援助行動や自己呈示動機、利他的動機に影響を与えるのかを明らかにすることである。

そして以下の2つを仮説とした。

仮説1

不在(観察者がいない状況)、同性(援助者と同性

の観察者がいる状況)、異性(異性の観察者がいる状況)、意中(援助者が意中に思う異性観察者がいる状況)の順に自己呈示動機が上がるが、異性・意中間の差はない。同様に助ける割合も上がり、山本・池上(2021)と似た傾向の結果が得られる。

仮説2

「自転車場面よりも踏切場面の方が助ける割合が減り、山本・池上(2021)と同様に自己呈示動機も減る。しかし、利他的動機は上がる。」とした。

方法

実験参加者

参加意思を示した18歳から63歳の男女95名(男性58名、女性36名、不明1名、 $M = 22.98$, $SD = 8.67$)を対象とした。

手続き

対象者に実験用冊子を配布しその場で回答を求め回収した。実験参加者は2種の援助場面のシナリオを読み、各シナリオを読み終わるごとに各項目に回答した。実験は2022年12月に実施した。冊子回収後に実験参加同意取り下げの申し出があった1名分のデータを除外し、94名(男性58名、女性35名、不明1名、 $M = 23.00$, $SD = 8.72$)を分析対象とした。

実験デザイン

山本・池上(2021)と同様に、観察者の要因として、観察者がいない状況(不在条件)、同性の観察者がいる状況(同性条件)、異性の観察者がいる状況(異性条件)、援助者が意中に思う異性観察者がいる状況(意中条件)の4水準とした。援助場面は、自転車場面と踏切場面の2水準であった。なお、山本・池上(2021)と違い、参加者は1つの要因に統一された2種の援助場面のシナリオを読み回答した。例えば、観察者の要因が不在であった場合、参加者は、不在・自転車場面と不在・踏切場面のシナリオを読み回答することになる。

援助の種類

山本・池上(2021)と同様に、援助行動は、駐

輪場で倒れた自転車を起こすのを手伝う内容と、電車で轢かれそうな中学生を踏切内に入り救助する内容の2種類を用いた。被援助者を男子中学生で統一した。しかし、援助者はシナリオ上の男子大学生ではなく実験参加者本人であった。

測定項目

測定項目は、「中学生Aの倒した自転車を起こすのを手伝う」と「踏切内に入り、中学生Bに肩を貸して一緒に踏切をわたる」は「1. はい 2. いいえ」の2件法。それ以外の測定項目は全て7件法で回答を求めた。自己呈示文脈の認識を「私は、男子中学生A以外の人に対して、自己アピールをすることができる状況にいた」等の2項目($\alpha = .84$)で測定した。これは観察者の存在に関する実験操作が有効に機能していたかをみる操作チェック項目として使用した。援助者である実験参加者が抱いた自己呈示動機を「周囲の人に対して自分を良く見せようとしていた」等の2項目($\alpha = .83$)で、利他的動機を「他者を思いやっていたものだった」等の2項目($\alpha = .74$)で測定した。また、分析や考察の参考材料として、「助けたいと思った程度」、「身体的援助コスト」、「心理的抵抗」、「援助成果」もそれぞれ1項目で測定した。

結果

記述統計と操作チェック

表1に各条件の平均値と標準偏差を示す。各変数の α 係数はすべて.70以上を示し、内的整合性が高いことが示された。また、表2には相関行列を示している。

観察者の存在に関する操作確認のため、自己呈示文脈の認識を従属変数として、重回帰分析を行った。観察者の実験条件は以下のコントラスト変数を用いて分析に投入した。観察者C1は、観察者がいない状況といる状況との比較を表す(不在条件 = -0.5、同性条件 = 0.5、異性条件 = 0.5、意中異性条件 = 0.5)。観察者C2は、同性がいる状況と異性がいる状況との比較を表す(同性条件 = -0.5、異性条件 = 0.5、意中異性条件 = 0.5)。観察者C3は、単なる異性がいる状況と援助者が意中に思う異性がいる状況との比較を表す(異性

表1 各条件における平均値と標準偏差、および α 係数

		不在	同性	異性	意中
	<i>N</i>	22	22	26	24
自転車場面					
自己呈示文脈	<i>M</i>	2.05	4.50	4.10	4.83
($\alpha=.84$)	<i>SD</i>	1.10	1.57	1.49	1.34
利他的動機	<i>M</i>	5.34	5.11	5.25	5.21
($\alpha=.74$)	<i>SD</i>	1.76	2.03	0.91	1.11
自己呈示動機	<i>M</i>	2.64	2.73	3.62	4.19
($\alpha=.83$)	<i>SD</i>	1.71	1.84	1.62	1.77
踏切場面					
自己呈示文脈	<i>M</i>	2.26	4.25	3.85	4.69
	<i>SD</i>	1.51	1.38	1.59	1.71
利他的動機	<i>M</i>	5.29	5.41	4.42	4.50
	<i>SD</i>	1.94	1.88	2.05	2.32
自己呈示動機	<i>M</i>	2.17	2.36	2.40	3.02
	<i>SD</i>	1.35	1.88	1.26	1.63

表2 相関行列

	自己呈示文脈	利他的動機	自己呈示動機	性別
自己呈示文脈	—			
利他的動機	.060	—		
自己呈示動機	.521**	.085	—	
性別	-.058	-.023	-.026	—

条件 = -0.5、意中異性条件 = 0.5)。また、2種類の援助場面間で自己呈示文脈の認識に差があるかどうかを確認するため、援助場面C(自転車場面 = -0.5、踏切場面 = 0.5)を作成し分析に投入した。

その結果、モデル自体が有意ではなく($R^2 = .07$, $p = .15$)、観察者C3が有意に影響しており($\beta = .25$, $p = .012$)、C1($\beta = .00$, $p = 1.00$)、C2($\beta = .00$, $p = 1.00$)、C($\beta = -.06$, $p = .52$)は有意に影響していなかった。つまり、異性・意中間での有意な差は見られたものの、モデル自体が有意ではない。そのため、観察者の操作は適切に機能しておらず自己呈示文脈の認識に影響していないことが示された。

重回帰分析による仮説検証

観察者の存在及び性別、援助場面が援助者の援助行動に及ぼす影響がみられるか検証するために、援助行動の値を従属変数として重回帰分析を行った。援助行動の値は「1. はい」を「1」とし「2. いいえ」を「0」とした。観察者の実験条件に関しては上記と同様のコントラスト変数を用いた。

その結果、モデル自体は有意であり($R^2 = .16$,

$p = .003$)、C1($\beta = .00$, $p = 1.00$)、C2($\beta = .00$, $p = 1.00$)、C3($\beta = .07$, $p = .48$)のいずれにも援助行動に及ぼす影響は有意でなかった。しかし、援助場面Cが及ぼす影響は有意であった($\beta = -.39$, $p < .001$)。つまり、観察者の有無や性別は援助行動に影響を及ぼしていないが、援助場面に関しては、自転車場面の方が踏切場面より援助行動が行われることが確認された。

表3 援助行動を従属変数とした重回帰分析

	β	
	援助行動	VIF
観察者C1(在 vs. 不在)	.00	1.00
観察者C2(同性 vs. 異性)	.00	1.00
観察者C3(異性 vs. 意中)	.07	1.00
援助場面C(自転車 vs. 踏切)	-.39**	1.00
R^2	.16**	

観察者の存在及び性別、援助場面が援助者の自己呈示動機に及ぼす影響がみられるか検証するために、自己呈示動機の値を従属変数として重回帰分析を行った。

その結果モデル自体は有意であり($R^2 = .16$, $p = .003$)、C3に有意傾向がみられたが($\beta = .18$, $p = .06$)、C1($\beta = .00$, $p = 1.00$)、C2($\beta = .00$, $p = 1.00$)、C3のいずれにも自己呈示動機に及ぼす影響は有意でなかった。しかし、援助場面Cが及ぼす影響は有意であった($\beta = -.35$, $p < .001$)。つまり、観察者の有無や性別が自己呈示動機に影響を及ぼしていないが、援助場面に関しては、自転車場面の方が踏切場面より援助者は自己呈示動機を抱きやすいことが確認された。

なお、「利他的動機」、「助けたいと思った程度」、「身体的援助コスト」、「心理的抵抗」、「援助成果」をそれぞれ従属変数として重回帰分析を行った。しかし、「心理的抵抗」を除くそれらはモデル自体

表4 自己呈示動機を従属変数とした重回帰分析

	β	
	自己呈示動機	VIF
観察者C1(在 vs. 不在)	.00	1.00
観察者C2(同性 vs. 異性)	.00	1.00
観察者C3(異性 vs. 意中)	.18	1.00
援助場面C(自転車 vs. 踏切)	-.35**	1.00
R^2	.16**	

が有意ではなかった。さらに利他的動機以外の4つに関しては、1つの質問項目で測定しており、的確に測れているとは言えない。以上の事からこれらの値は信頼性に問題があると判断したため、結果の記載は省略した。

考 察

本研究では、山本・池上（2021）で得られた評価者である実験参加者が推測した援助者の自己呈示動機と実際に援助者が抱いている自己呈示動機は一致しているかどうかの検討と、観察者や場面といった要因が援助行動や自己呈示動機、利他的動機に影響を与えるのかの検討であった。

仮説1の「不在、同性、異性、意中の順に自己呈示動機が上がり（異性・意中間の差なし）、同様に助ける割合も上がり、山本・池上（2021）と似た傾向の結果が得られる」に関して検討を行った。その結果「援助行動」と「自己呈示動機」どちらも有意な結果が認められず仮説は支持されなかった。つまり、観察者の有無と性別が援助行動と自己呈示動機に及ぼす影響は無かったという結果になった。

このような結果になった理由の1つに統制条件である観察者の有無や性別が統制しきれなかったことが考えられる。具体的に言うと、不在条件に関しては援助者本人と被援助者以外はいないという設定であったが、新たに人が通りかかって目撃するかもしれない可能性を援助者である本人が捨てきれなかったことが考えられる。現に自己呈示文脈の回答を見ると、不在条件であるにも関わらず、自己呈示文脈得点が高い人がいた。

同性条件に関しては、異性・意中と違い、実験参加者（援助者）の観察者に対する好感度や好意が統制できずうまく結果に表れなかったことが考えられる。山本・池上（2021）の同性条件の場合は援助者も観察者も自分以外であるため、客観的な視点になりやすく、援助者と観察者の関係性をフラットに見られたかもしれない。しかし自身が援助者の立場になると、自分の経験に当てはめてしまうため、サークル内の誰とも仲が良い人は同性の観察者に対する好意は高く、そうでない場合は好意が低くなってしまったと考えられる。自己

呈示文脈項目においてはC3（異性・意中）に有意傾向がみられたことも、不在・同性条件が曖昧で統制しきれしていないことを裏付ける根拠となるだろう。

また、今回得られた、観察者の有無と性別が援助行動と自己呈示動機に及ぼす影響は無かったという結果は概ね正しかったと解釈することもできる。山本・池上（2021）では観察者の有無と性別が第三者の動機推測に及ぼす影響を調べた。その結果、「観察者がいない状況よりもいる状況の方が、同性の観察者がいる状況よりも異性の観察者がいる状況の方が、自己呈示動機が推測されやすく、観察者が意中の異性かどうかは影響しない」ことを示した。それに対して、本研究では、「観察者の有無と性別が自己呈示動機に及ぼす影響は無い」という結果になった。この2つの研究の結果から、「第三者が抱く援助者に対する自己呈示動機の推測と、実際に援助者が抱く自己呈示動機には差がある」ということが考えられる。つまり、人は誰かの援助に関しては、観察者がいると「その観察者に対して良いところを見せて自分をアピールしよう」と考えているのではと推測して援助者を評価する。しかし、実際に自身が援助者の立場になった場合は、観察者がいるか、観察者は誰か、自己アピールをしよう、などということは意識していないと考えることができる。

このように推測する他者の自己呈示動機と実際に抱く自己呈示動機に差がある理由として、「外発的インセンティブバイアス」が挙げられる。Chip Heath（1999）によると、外発的インセンティブバイアス（Extrinsic incentives bias）とは、人は他者の行動を外発的動機づけの観点から説明し、自身の行動を内発的動機づけの観点から説明する効果の事である。例えば、外発的動機づけは、お金や名声など外的なもののために行為を行うことで、内発的動機づけは興味ややりがいなど人の内面的なことから行為を行うことである。今回の場合、山本・池上（2021）では、参加者は援助者の援助を外発的動機づけ（他者からの評価のためなど）で説明した。本研究では、参加者は自身の援助を内発的動機づけ（心から助けたいと思ったなど）で説明したといえるだろう。

また、対立する考えとして、人は他者の行動を

内発的動機づけの観点から説明し、自身の行動を外発的動機づけの観点から説明する「行為者－観察者バイアス」がある。しかし、人はポジティブな行動に対しては「外発的インセンティブバイアス」を、ネガティブな行動に対しては「行為者－観察者バイアス」で判断するのではないかと考えた。例えば、ポジティブな行動に関しては本研究でも扱った援助行動が当てはまるだろう。ネガティブな行動に関しては、自身が遅刻した際は朝寒かったことを理由にするが、他人が遅刻した際はその人自身がだらしないことを理由にするなどが当てはまるだろう。

以上のように本研究で得られた結果が正しい前提で論じると、山本・池上（2021）の結果と本研究の結果は「外発的インセンティブバイアス」で説明できると考えた。さらに、人はポジティブな行動に対しては「外発的インセンティブバイアス」を、ネガティブな行動に対しては「行為者－観察者バイアス」で考える傾向があると考えられる。つまり「人は自分に甘く、他人に厳しく考える傾向がある」とも考えられるだろう。

仮説2の「自転車場面よりも踏切場面の方が助ける割合が減り自己呈示動機も減るが利他的動機は上がる」の「助ける割合」に関して、仮説が支持された。つまり、援助場面が援助者の援助行動に影響を及ぼしており、自転車場面の方が踏切場面よりも援助行動を行う人が多いことが示された。

このような結果が得られた理由として、労力や時間、心理的負担といった、援助コストの差が考えられたが、「援助行動」を従属変数とし、「助けたいと思った程度」、「身体的援助コスト」、「心理的抵抗」、「援助成果」をそれぞれ独立変数とし重回帰分析を行った結果有意な差は得られなかった。別の要因があると考えられる。例えば、自転車を一緒に起こすことは経験した人が比較的多くどのような手順で助ければよいか想像しやすいが、踏切内にいる人を助けた経験はある人は少ないと考えられる。そのため、踏切内にいる人を助けるイメージがしにくく、助けないという選択をしたと考えられる。そのため今後の反省としては、参加者の援助に関する過去の経験も測定するとより正確な解釈ができるだろう。

次に、「自己呈示動機」に関して、仮説が支持さ

れた。つまり、援助場面が援助者の自己呈示動機に影響を及ぼしており、自転車場面の方が踏切場面より自己呈示動機を抱きやすいことが示された。

このような結果が得られた理由としては、人は必要性が薄い援助であるほど自己呈示動機が強くなることが考えられる。Staub（1979）は援助行動の生起に影響すると考えられる状況特性の一つに援助の必要性を挙げている。一般に必要性が高いほど援助は行われやすく、必要性が低いと援助は行われにくい。そのため、援助の必要性が低いと判断される中であえて行われた援助行動は、純粋な利他的動機以外の動機（被援助者に対する下心、周囲に対する自己アピールなどの自己呈示）が伴いやすいということだ。

また、利他的動機に関して、仮説が支持されなかった。つまり、援助場面は利他的動機に影響を及ぼしていないことが示された。

このような結果が得られた理由の1つとして、まず自転車場面も踏切場面も人が困っていたら助けるべきという社会的規範が働いて利他的動機が介入する隙が無かったことが考えられる。しかし利他的動機尺度得点の平均がどちらの場面も5前後で比較的高かったのでこの理由は違うと考えてよいだろう。そしてもう1つが自転車場面において自己呈示動機も利他的動機も高い人が多い可能性だ。自己呈示動機と利他的動機はセットで検討されることが多いが相反するものではなくどちらも高いことがある。例えば、自転車を起こすを手伝う時、「手伝うと周囲に自己アピールできるし、助けられた人のためにもなって一石二鳥」などと考える人は自己呈示動機も利他的動機のどちらも高くなる。また、援助コストが高く緊急性の高い踏切場面は損得勘定をする暇がなく自己呈示動機が低く利他的動機が高い傾向になる。そして結果的に2つの場面における利他的動機得点が高くなると考えられる。

最後に全体的な反省として、援助者の動機推測を目的とした先行研究をベースにできる限り変更を加えない形で本研究を行ったため、統制条件や測定項目が適切でなかった可能性が多分にある。そのため、より適切な統制を行い、適切な測定項目を設けると違った結果が得られるかもしれない。例えば、統制に関しては、異性の観察者をただの

異性と意中に思う異性で分けたように、同性の観察者も知り合いの同性と仲の良い同性に分ける。そうすると、援助者の観察者に対する好意を統制することができたかもしれない。

逆に先行研究からの変更点が正確な分析や測定に悪影響を及ぼしている可能性もある。先行研究では実験参加者1人が1つのシナリオを読んで回答している。しかし、本研究では、観察者を統一した場面が違う（自転車と踏切）2つのシナリオを読んで回答した。そして先行研究と同様に重回帰分析を行った。本研究のように参加者間要因の一部に参加者内要因が含まれている場合、一般化線形混合モデルなどを用いて、それに対応する変量効果をモデルに組み込まないと正確な推定ができず、不当に有意になりやすくなる。そのため、参加者間要因のみで調査を行うか、対応するモデルを組み込むことが必要であろう。

そして、測定項目に関しては、直接的な表現が多かったため、参加者は社会的に望ましさによる影響を受けて回答を行った可能性が考えられる。そのため、信頼性のある遠回しな表現を使った測定項目で調査を行うとより正確な結果が得られるだろう。

引用文献

- Chip Heath. (1999). On the Social Psychology of Agency Relationships: Lay Theories of Motivation Overemphasize Extrinsic Incentives. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 78 (1), 25-62.
- Cottrell, N. B., Wack, D. L., Sekerak, G. J., & Rittle, R. H. (1968). Social facilitation of dominant responses by the presence of an audience and the mere presence of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 245-250.
- フジテレビ (2019). 尾島春夫 人生は恩返し ～スーパーボランティアと呼ばれた男～<https://www.fujitv.co.jp/fnsaward/28th/tos.html> (2023年1月7日)
- Havighurst, R. J. (1972). *Developmental Tasks and Education*. (3rd ed.). New York: David McKay Company Inc. (ハヴィガースト, R. J. 児玉憲典・飯塚裕子 (訳) (1997). ハヴィガーストの発達課題と教育：生涯発達と人間形成 川島書店)
- 河村 悠太・楠見 孝 (2015). 利他性の推論に援助者・被援助者の性別が及ぼす影響 日本心理学会第79回大会発表論文集, 281.
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1990). Impression management: A literature review and two-component model. *Psychological Bulletin*, 107, 34-47.
- Phillips, T., Barnard, C., Ferguson, E., & Reader, T. (2008). Do humans prefer altruistic mates? Testing a link between sexual selection and altruism towards non-relatives. *British Journal of Psychology*, 99, 555-572.
- Reeder, G. D., Vonk, R., Ronk, M. J., Ham, J., & Lawrence, M. (2004). Dispositional attribution: Multiple inferences about motive-related traits. *Journal of Personality and Social Psychology*, 86, 530-544.
- Staub, E. (1979). *Positive social behavior and morality: Vol. 2. Socialization and development*. New York: Academic Press.
- 高木 修 (1997). 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要 29 (1), 1-21.
- 高木 修 (1998). 人を助ける心 サイエンス社.
- 谷口 淳一 (2012). 援助行動の意図性と特定性が好意伝達の可否に与える影響 対人社会心理学研究, 12, 135-141.
- 谷口 淳一・大坊 郁夫 (2005). 異性との親密な関係における自己呈示動機の検討 実験社会心理学研究, 45, 13-24.
- Van Vugt, M., & Iredale, W. (2013). Men behaving nicely: Public goods as peacock tails. *British Journal of Psychology*, 104, 3-13.
- 山本 佳祐・池上 知子 (2021). 援助行動が自己呈示とみられるとき：観察者の有無と性別が動機推測に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 61, 1-9.

付 録

付録1 本研究で使用したシナリオ内容

自転車場面×観察者不在

大学に入学して1ヶ月が経ったある日の放課後、私は帰宅しようと、大学からの最寄り駅にある駐輪場へ向かった。駐輪場に到着したが、そこには誰もいなかった。私は自分の自転車のところに向かうと、見知らぬ男子中学生 A が来て、そばで自転車を出そうとした。そのとき、中学生 A は他の人の自転車に接触し、5台ほど倒してしまった。大きな音がしたが、他には誰もその様子を見ていなかった。

踏切場面×観察者不在

大学に入学して1ヶ月が経ったある日の放課後、私は帰宅しようと大学からの最寄り駅に向かった。踏切に差しかけたとき、線路の反対側を見たが誰もいなかった。警報音が鳴ったので、私は立ち止まって待つことにした。すると、後ろから見知らぬ男子中学生 B が走ってきて、踏切内に駆け込み、線路の真ん中で転倒したのが見えた。中学生 B は足をひねって歩きにくそうにしていた。しかし誰もその様子を見ていなかった。

自転車場面×同性観察者

大学に入学して1ヶ月が経ったある日の放課後、私は帰宅しようと、大学からの最寄り駅にある駐輪場へ向かった。駐輪場に到着すると、自分と同じサークルに所属する同性の学生が、向こうのほうに一人で見えた。私は自分の自転車のところに向かうと、見知らぬ男子中学生 A が来て、そばで自転車を出そうとした。そのとき、中学生 A は他の人の自転車に接触し、5台ほど倒してしまった。大きな音がしたので、離れたところにいる同性の学生もこちらを向いて様子を見ていた。

踏切場面×同性観察者

大学に入学して1ヶ月が経ったある日の放課後、私は帰宅しようと大学からの最寄り駅に向かった。踏切に差しかけたとき、自分と同じサークルに所属する同性の学生が、線路の反対側に一人で見えた。警報音が鳴ったので、私は立ち止まって待つことにした。すると、後ろから見知らぬ男子中学生 B が走ってきて、踏切内に駆け込み、線路の真ん中で転倒したのが見えた。中学生 B は足をひねって歩きにくそうにしていた。反対側にいた同性の学生もその様子を見ていた。

自転車場面×異性観察者

大学に入学して1ヶ月が経ったある日の放課後、私は帰宅しようと、大学からの最寄り駅にある駐輪場へ向かった。駐輪場に到着すると、自分と同じサークルに所属する異性の学生が、向こうのほうに一人で見えた。私が自分の自転車のところに向かうと、見知らぬ男子中学生 A が来て、そばで自転車を出そうとした。そのとき、中学生 A は他の人の自転車に接触し、5台ほど倒してしまった。大きな音がしたので、離れたところにいる異性の学生もこちらを向いて様子を見ていた。

踏切場面×異性観察者

大学に入学して1ヶ月が経ったある日の放課後、私は帰宅しようと大学からの最寄り駅に向かった。踏切に差しかけたとき、自分と同じサークルに所属する異性の学生が、線路の反対側に一人で見えた。警報音が鳴ったので、私は立ち止まって待つことにした。すると、後ろから見知らぬ男子中学生 B が走ってきて、踏切内に駆け込み、線路の真ん中で転倒したのが見えた。中学生 B は足をひねって歩きにくそうにしていた。反対側にいた異性の学生もその様子を見ていた。

自転車場面×意中観察者

大学に入学して1ヶ月が経ったある日の放課後、私は帰宅しようと、大学からの最寄り駅にある駐輪場へ向かった。駐輪場に到着すると、自分が恋愛感情を抱いている同じサークルの学生が、向こうのほうに一人で見えた。私が自分の自転車のところに向かうと、見知らぬ男子中学生 A が来て、そばで自転車を出そうとした。そのとき、中学生 A は他の人の自転車に接触し、5台ほど倒してしまった。大きな音がしたので、離れたところにいた自分が恋愛感情を抱いている学生もこちらを向いて様子を見ていた。

踏切場面×意中観察者

大学に入学して1ヶ月が経ったある日の放課後、私は帰宅しようと大学の最寄り駅に向かった。踏切に差ししかかったとき、自分が恋愛感情を抱いている同じサークルの学生が、線路の反対側に一人で見えた。警報音が鳴ったので、私は立ち止まって待つことにした。すると、後ろから見知らぬ男子中学生 B が走ってきて、踏切内に駆け込み、線路の真ん中で転倒したのが見えた。中学生 B は足をひねって歩きにくそうにしていた。反対側にいた自分が恋愛感情を抱いている学生もその様子を見ていた。

付録2 本研究で使用了質問項目

- ① 中学生 A の倒した自転車を起こすのを手伝う（用事等はなく時間に余裕があるものとします）。
- ① 踏切内に入り、中学生 B に肩を貸して一緒に踏切をわたる（用事等はなく時間に余裕があるものとします）。
- ② 私は、男子中学生 A 以外の人に対して、自己

アピールをすることができる状況にいた

- ③ 私の行いは、男子中学生 A 以外の人たちに見られている状況であった
- ④ 中学生 A を助けたいと思った
- ⑤ 中学生 A を手伝うことは労力を費やすと思った
- ⑥ 中学生 A を手伝うことに抵抗があった
- ⑦ 中学生 A を手伝うことで A 本人は助かると思った
- ⑧ 私の行いは、他者を思いやっていたものだった
- ⑨ その行いによって周囲の人に対して自分を良く見せようとした
- ⑩ 私の行いは、男子中学生 A を配慮してのものであった
- ⑪ 私の行いは、周囲の人の目を意識してのものであった

各質問項目は、

- ①援助行動をするか否か、②③自己呈示文脈の認識、④助けたい程度、⑤身体的労力、⑥心理的抵抗、⑦援助成果、⑧⑩利他的動機、⑨⑪自己呈示動機

を測定する項目として用いた。

謝 辞

本論文の作成にあたり、終始適切な助言を賜り、また丁寧に指導して下さい、さらには質問紙の配布も行って頂いた神原歩先生に感謝いたします。

また、一緒に分析や質問紙作成等を行ってくれたゼミのメンバーにも心から感謝いたします。

そして、本研究の趣旨を理解し、年末という忙しい時期にも関わらず、快く質問紙調査に協力して頂いた全ての方々にも心から感謝いたします。ご協力ありがとうございました。

最後に改めて、本研究に関わってくださった皆様本当にありがとうございました。皆様の協力無しに本論文は完成できなかったです。